



地球のいのちの営みと調和、融合して
共に生きるコミュニティづくりの情報を発信する

いのちの森通信



公益財団法人
いのちの森
文化財団



Vol. 30
2014.Apr

平成26年4月10日発行
編集 山下 薫

発行/ 公益財団法人いのちの森文化財団 〒380-0888長野市大字上ヶ屋2471番地2198 TEL 026-239-0010 FAX 026-239-0011
ホームページ <http://inochinomori.or.jp> Eメール zaidan@inochinomori.or.jp

T先生との出会いと 不思議な体験

自殺寸前のどん底で夜空に向かつて「神様、道を開いてくれ！」と絶叫する中で、「30点の男がその30点をこれ以上できんくらい生かしまくった文句あるか！」と言ったら、「文句ない!!」と響き返して来た。そのとたん、信じられないくらい猛然と腹の底から元気が溢れ出した。(心の深層の目覚め)が起きた。すると何と、外側に新しい出来事がすごいスピードで展開し始めました。T先生との出会い、就職と結婚が半年以内で起こったのです。

連載 『ほんとうの自分』とは？

道は開けた！ 新しい出会い

第六回

馬場 俊彦

(名城大学名誉教授)



でなかったら、聖書はインキキから自分の使命は世界中の聖書を破り捨てて廻ることだ、とまで思いました。そんな時、T先生の本に出会ったのです。T先生の所ではそのような新生体験が続出していると知って、何とかして会いたいと思っていた時、富士山麓で一夜集会有ると聞き、必死の思いで参加しました。昭和36年6月23日のことです。するとその徹夜の祈り会で不思議な体験をしました。「頭で立派な言葉を並べる祈りは天井より上に届かぬ。感情を込めても同じだ。言葉は何でもいい、腹の底から神を求めて叫べ！」と。その通り叫び始めると突然倒れ伏し、日本語でない不思議な言葉が口から溢れ出し(聖書で言う異言)、それが鎮まると、何かキリストご自身が私を見つめて語られるように感じました。フト目覚めると会場は静まり返って、皆さん私を見つめておられます。起きるとT先生が私に「キミ、名は?」「ハイ、馬場俊彦です」「馬場君、キミは今日から新しい人生が始まる」と言われました。東京に帰ると、毎日がほんとうに不思議でした。「神様!」と言った途端、すぐ目の前におられるように感じるようになったのです。私は「頭がおかしくなったのか?」と思いましたが、でも何かいつも不思議な希望が湧いて来て「これから素晴らしいことになり!」と聞こえるような気がするのです。

私は死んでからでなく、今の自分を何とかしてほしいと思っているのに、聖書を見るとイエスは悩み苦しんでいる人をその場で癒し救われた、これが本来のキリスト教だ、この広い世界のどこかにこの本物のキリスト教を実行しているところがあるはずだ、そう

8月1日から3日間別府で全国大会があるというので旅費を工面し7月末に熊本のT先生の所に行き、70人くらいの集まりで、指名されるままに最近自分に起こったことを話し始めると、T先生から「馬場君、声が小さいぞ」とお声がかかりました。それで、思わず「エー、東京から参りました馬場と申します」と声を張り上げると、何

か不思議に気持ち解放され、楽しくなり手振り身振りまで出る話し方になりました。T先生も楽しそうでした。そして本番の別府の集会に参加するといきなり「体験」を語るよう指名されました。千人余りの皆さんの前に立つとスピーカーが不調な音を立て始めたので、切つてくださるようお願いし、大声で話し始めました。すると不思議なことが起こりました。考えてもいなかった言葉が次々と力強く口から溢れ出し、会場がシーンと静まり返りました。私はというと、言葉が背筋の底からひとりどりで溢れ出して話している自分を、もう一人の自分が驚いて見ているという感じです。しめくくりの言葉がピタッと湧いて来て話し終わると、満場の拍手です。「普段のあなたと別人のようだった」とある知人が言われました。

8月の下旬のある日、所用で東京されたT先生が私を電報でホテルに呼ばれ、駆けつけると、御馳走してください、こう言われました。「キミに頼みがある。ワシの弟子になってくれ。キミは珍しい素質を持っている。キミを育てたい」と。私はビックリしました。東大から見離されたこの私を育ててくれる!?「ありがたいです。どうぞお願いします」「ありがたい。では、もう一つ、結婚しないか、いい人を紹介しよう」「エッ!私はまだ驚いて言いました。「ソナナ!ダメです、僕、月収一千万円です。こんな男に嫁さんの来手などありません、途端にビックリするよいうな大声で怒鳴り上げられました。」

この一言は、生涯忘れることはありません。「では、お願いします!」すると直ぐ電話で一人の女性を呼ばれました。「馬場君、この人だが文句あるか?」見ると、地味な服装ですが、立派な女性です。「文句、ございません」「昌子さん、この男性だが」「ありがたいです」

キミは尊いんだ!

この女性は、聖路加看護専門学校を卒業し、聖路加病院で働いていたのですが、東京大学医学部に衛生看護学が新設される時、看護学の助手に任命され、24歳で講義を始め、アメリカに留学、看護教育学を専攻、帰国後大活躍をしていたのです。しかし、一身上の問題で悩み、T先生の教えを受け始めていたのです。そして「あなたには別の人生が待っている」との助言で、大決心をしたのでした。その女性が東大追放の私に来てくれるとは!

「やあ、今夜はめでたい!婚約成立!ありがたい、おめでとう!」とT先生、そして何と、結婚式はT先生の提案で翌々日となりました。「金曜日、わしはイスラエルの聖地旅行に出発する」それで先生のご帰国まで3カ月の交際期間であつた結婚式と思つたら、「水曜日と木曜日は忙しい、で、火曜日に結婚式とする」との言葉で、また驚きました。これがT先生流のなさり方でした。ホテルでの簡単な式、出席者はT先生の東京の少数の仲間たちだけでした。9月12日のことでした。

T先生の聖書塾のある熊本への旅が《新婚旅行》でした。先生の留守中にインドの聖者サンダーシングの伝記の翻訳をしました。先生は旅行から帰られると塾生一同に「私は今年、得難い人物を得た。この馬場君である。諸君、しつかり馬場君に学びなさい。私も学ぶ」と皆さんに紹介され、感激しました。熊本の町はずれに六畳一間のアパートに居を構えて間もなく、妻のお胎に子が宿つていることが分かった時、私はもう感動で胸がいっぱいになり、思わず泣き出しそうになりました。あの絶



叫の夜から半年足らず……。あの夜「神様、おんなら道を開いてくれ!!」と叫んだら、今こんなになつていて!!頭でどう考えようと魂の深いところで私は「神様が確かに答えてくださった!」と思わざるを得ませんでした。予想をはるかに超える素晴らしい道が「祈りに応える神がいる!」それを体験したのでした。

しかし人生には思いがけない前進が起こります。T先生の許で新しい経験を積み重ねる間にさらに大きな疑問にぶつかり、5年後ついに思いもよなかつたT先生との決別に至つたのです。そして、半年の失業後、思いもよなかつた新しい道、「これこそ我がいのちの燃焼の場!」名城大学への道が開けたのです。

付記:この名城大学と幾つかの看護学校で「哲学・人間学」の講義で学生さん・看護師さんたちの様々な体験と向き合う中で、いよいよ人間のいのちの奥深さを感じ、感動が深まり、それを本にまとめたという願いが生まれ、パソコンを覚え自分で打ち挿絵もいっぴい湧き上がり上下千頁ほどの本になりました。大学院の社会人学生の方も「大切な人生の宝を有り難う」「この本に10年前に出会つていたら私の人生は変つていた」などと言つて下さいました。この『ほんとうの自分』(上下)は長い間絶版でしたが、このたび塩澤研一様より様のお励ましにより再版になりました。皆様のご参考になれば有り難いです。

●馬場先生の『ほんとうの自分』再版が出来上がりました!

▼お申し込みは、いのちの森「水輪」まで
電話026-239-2630
上巻・下巻各千円にて頒布しております

ばばとしひこ 1932年岐阜県に生まれる。1951年東京大学文科一類入学。出世競争に驚き文学部哲学科に転進。修士修了するも博士課程不合格。前途に絶望。ある夜自殺寸前から立ち上がり、以後不思議な人生の展開を経験。1966名城大学就職、理工学部で英語・哲学担当。同大学大学院総合学術研究科・経営学研究科、また愛知医科大学看護学部で人間学を講義。現在名城大学名誉教授。

いよいよ最終章の 事業展開が始まります

本財団は生から死に至る意識の変容を共に学び生きる機会を多くの人々と共有することを目的として設立された教育文化事業財団です。

本年度8年目を迎える財団はこの8年間に「生老病死」という大きな課題について教育・文化という視点から様々な学びの場を提供してきました。

癌の患者さんのための養生塾は多くの方々に帯津良一先生を通して病に対する意識の深化を共有してきたのではないかと

思いますし、青少年育成講座は年々充実し、本年は鹿児島大学稲盛アカデミー専任教授の奥健一郎先生を講師として年12回、2泊3日の講座が開催されております。

また老若男女を問わず心の学びとして高野山から宮島基行阿闍梨、脳神経外科の久間祥多先生、精神科の巽信夫先生、井上弘寿先生などをはじめとして15人の招請講師の方々による学びの場を提供させて頂いております。

そして本年はいよいよ最終章としての今年でのご支援頂いてきました「高齢者の生きがい創造基金」を用いた事業展開が始まります。

すでに昨年はそのフィールドとして当財団の南隣に広がるNEC山荘(敷地2,700坪、建物地下1回、2階建て約300坪、テニスコート2面)の取得について所有者であるNEC健保組合と合意しており、現在その手続きと今後の計画等についても関係省庁との協議に入っております。

よりよく生き、よりよく死ぬために 高齢者のための 生きがい創造基金活用の 事業推進について

塩澤 研一

(いのちの森文化財団 副代表理事)



学びと生活の場としての ホームホスピスの 生活空間

さて、この高齢者のための生きがい創造基金の活用については、ここ数年間にわたり構想を積み重ねてきておりますが、既存のいわゆる特別養護老人施設や老健施設、デイサービスセンターとは少し趣を異としております。

障がいを持つ人々の施設においても医療施設においても根本的に異なるのは「生活感」と「人間観」にあるのではないかと

思っています。私の両親も最後は介護施設のお世話になりました。

その施設の職員の方たちは一生懸命介護をして下さったのは大変ありがたかったです。

が、面会に行くたびに「いつ出してくれんだ」との質問には答える言葉が失ってしまいました。やはり自分の家ではないのです。

制度にも問題はあるのでしようが、「昼の上で死にたい」という人間としてのやすらぎと尊厳を全うできるような死のあり方を模索し続けてきました。

一つは入所者と職員というヒエラルキーの問題もあります。人間として老いるということは肉体的、精神的にも衰えることは否めないと思いますが「魂」(心・意識)の問題としてとらえ返せば、そこには尊敬と慈愛の思いがどうしても必要なのではと思います。

家庭の延長線上に介護が問題なく存在すればよいのですが、残念ながら共倒れというのが現実です。

そこでホームホスピスの生活空間として、まさしく学びと生活の場としてのコミュニティの創設が求められているのではないかと

思っています。この1月、2月と娘の早穂理は昨年5月に続いて風邪とインフルエンザに感染し、かなり危ない状態が続きまして、帯津先生が毎日電話で診察して下さいました。

と、長野日赤の訪問看護の深澤さんと愛和病院の山田先生が往診し医療的なサポートをして頂き、またスタッフや実習生の心からの応援を頂いたおかげで何とか復帰することができました。

従来病院に入院した際には、様々な病原菌による二次感染に加え過酷な看護体制は看護する側の健康にも大きな影を落とす家族共倒れに近い状態になってしまいました。

「いのちの森ホームホスピス」(仮称)はちよつとおしゃれな自宅をイメージした生活空間として設立準備に入っております。

この美しい大自然と様々な学びの機会、完全無農薬の野菜によるおいしい食事、若い青年たちとの交流などなど現在行われているいのちの森の活動に連動した流れの中に介護も存在できるような構想を21世紀のコミュニティの創造として実現に向けて歩みはじめました。

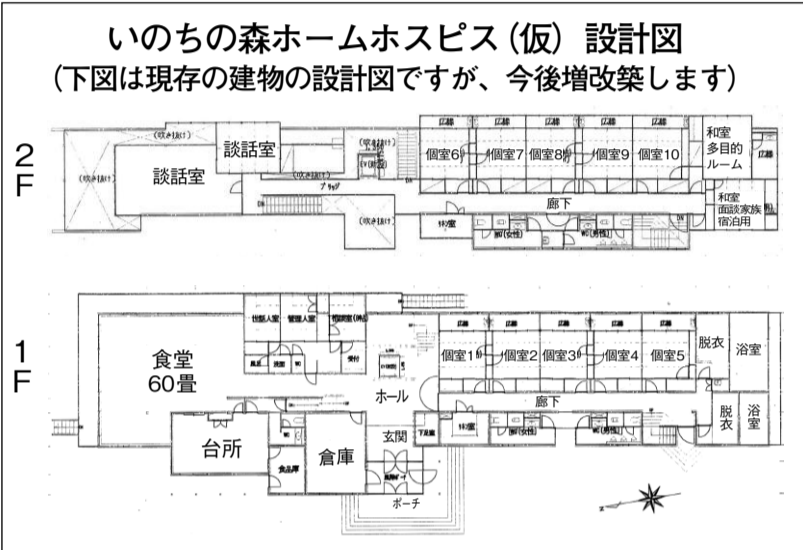
28年開設の計画です。改めて物心両面のご支援をお願い申し上げます。

ちよつとおしゃれな 自宅をイメージ

この課題は、私たちがどのような「死」を願っているのかに

関わってきますが、少なくとも年齢がある程度取っている場合に於いては、穏やかな「死」を求めているのではないかと

思っています。私自身がすでに後期高齢者の仲間入りをしている今日において自分の死を思うときに、こんな死に方をしたいと思わずにはいられません。



「いのちの森ホームホスピス」(仮称)はちよつとおしゃれな自宅をイメージした生活空間として設立準備に入っております。この美しい大自然と様々な学びの機会、完全無農薬の野菜によるおいしい食事、若い青年たちとの交流などなど現在行われているいのちの森の活動に連動した流れの中に介護も存在できるような構想を21世紀のコミュニティの創造として実現に向けて歩みはじめました。28年開設の計画です。改めて物心両面のご支援をお願い申し上げます。

2014年 いのちの大学講座 (学長 帯津良一・副学長 巽信夫) ~人生をよりよく生きる~ (日程は変更になることがあります)

「がん患者のための合宿養生塾」
講師 帯津良一先生(帯津三敬病院名誉院長)
2014年 5月4日(日)~9日(金)
8月22日(金)~27日(木)
11月22日(土)~27日(木)

「いのち学」
講師 帯津良一先生(帯津三敬病院名誉院長)
2014年 5月4日(日)~9日(金)
8月22日(金)~27日(木)
11月22日(土)~27日(木)

「生老病死のホメオパシー講座」
講師 帯津良一先生(帯津三敬病院名誉院長)
2014年 7月19日(土)~21日(月祝)
10月11日(土)~13日(月祝)

【内容】風邪・インフルエンザの対応/花粉症の対応/慢性疾患と急性疾患について/各種がん・重病への対応/女性と男性に特有の病気/怪我・骨折の手当て、救急時/不安・集中力の低下の対応/人間関係のストレス、死に臨んで家族関係と子供の問題/なんでもQ&A

「心の探求 ~般若心経の真髄をひもとく~」
講師 宮島基行先生
(高野山真言宗阿闍梨 南山進流声明第一人者)
2014年8月29日(金)~31日(日)

「日常断食」
講師 宮島基行先生
(高野山真言宗阿闍梨 南山進流声明第一人者)
2014年5月16日(金)~18日(日)、11月

「心の病とやさしい心理学」
講師 井上弘寿先生(精神科医)
2014年11月9日(日)

「脳と心の勉強会」
~脳と心と体のつながりについて学ぶ~
講師 久間祥多先生(脳神経外科医)
2014年 5月10日(土)~11日(日)
2014年 10月4日(土)~5日(日)

「気功合宿」
講師 中健次郎先生(気功家・鍼灸師)
2014年 9月19日(金)~23日(火祝)

「君の思いは必ず実現する」全12回連続講座
講師 奥健一郎先生
(国立大学法人鹿児島大学 稲盛アカデミー専任教授)

4月25日(金)~26日(土)/中村天風に学ぶ心の探究
5月23日(金)~24日(土)/坂本龍馬の志と生き様
6月27日(金)~28日(土)/聖徳太子の17条憲法を紐解く
7月25日(金)~26日(土)/松下幸之助に学ぶ経営の心の探究
8月15日(金)~16日(土)/井深大のチャレンジ精神
9月19日(金)~20日(土)/吉田松陰の志と松下村塾
10月17日(金)~18日(土)/稲盛和夫の経営哲学を紐解く(1)
11月14日(金)~15日(土)/稲盛和夫の経営哲学を紐解く(2)
12月19日(金)~20日(土)/体験発表とまとめ

日本航空(JAL)を再建した京セラ名誉会長稲盛和夫氏の珠玉の言葉の数々。その人生体験と教えを歴代先人達人の教えを交えながら奥健一郎先生からお話しいただきます。
【2014年】
4月 山田 研吾 先生(公益財団法人自然農法国際研究開発センター)

4月 山下 宗洋 先生(茶道裏千家準教授)
5月 内田 明子 先生(子供の森幼児教室)
6月 馬場 忠寛 先生(芸術家・ギャラリー煉)
7月 小林 由紀子 先生(ボディワークインストラクター)
8月 山田 研吾 先生(公益財団法人自然農法国際研究開発センター)
9月 中 健次郎 先生(気功家・鍼灸師)
10月 宮島 基行 先生(高野山真言宗阿闍梨)
11月 帯津 良一 先生(帯津三敬病院名誉院長)
12月 高野 道隆 先生(会社役員)

「自然観察」
講師 塩澤 研一(いのちの森文化財団副代表理事)
信州の美しい自然観察を通して環境問題を考える講座と実習。清掃活動も同時に行う。

「集中内観セミナー」【随時開催】
面接 塩澤 研一(日本内観学会会員)

「リーダーシップセミナー」【随時開催】
講師 塩澤 みどり(いのちの森文化財団代表理事)

「青少年育成・自立支援個別相談事業」【随時対応】
相談者 塩澤 みどり(いのちの森文化財団代表理事)
アドバイザー 巽 信夫(前信州大学医学部助教授)

「こけ玉グリーンアートセラピー」【随時開催】

「いのちの森の学校」【随時受入】

「シーズンチャレンジボランティア」【随時開催】
長野市社会福祉協議会主催のサマーチャレンジボランティアへなどの協力

「『総合的な学習の時間』の支援としての農業体験」【随時受入】

※詳細はお問い合わせ下さい
いのちの森文化財団事務局 TEL 026-239-0010

二十年来の友人である橘川幸夫さんが「森を見る力」(晶文社)という本を出版した。一九九〇年代の初頭から、インターネット時代を予測し、現在もデジタルメディア研究を主催している橘川さんが、久しぶりに「アフター・インターネット」時代の「生き方」を社会に問いかけた……と、書く「ネットはどう儲けるか」のようなノウハウ本だと誤解されそうだが、この本に書かれてあるのはネットビジネスから一番遠いことだ。

この本の出版記念パーティをするにあたって「発起人をよろしく」という依頼が来た。「今回のパーティはクラウドファンディングでやってみようと思う」とのこと。クラウドファンディングとは、「クラウド(群衆)」と「ファンディング(資金調達)」を合わせた言葉だ。簡単に説明すると、ネット上で有志が集まって人々や組織に活動資金を援助したり、資金協力をすることである。最近流行りの、このクラウドファンディングを使って、イベントを企画できるかどうか、まずは自分の出版記念パーティで試してみようというのである。

そんなわけで、「森を見る力」の出版記念パーティは、支援者を募ることとなった。ふつう、出版記念パーティは会費制である。友人など親しい関係者が集まって内輪でわいわいと祝うものなのだが、今回は「このイベントを実現するための目標金額」が定められた。それが八十万円だった。出版記念会なのに「ブースを出店できる」という特典がついており、集客二百人が目標のこの「イベント」に、どのような形で支援するか、参加パターンが設けられていた。ボランティア参加、ブース出店参加、二次会まで参加……と参加形態ごとに支援金額が異なる。

「どうして？」
「日本には寄付文化ってものが根付いていないから、みんなピンと来ないんだよな」
「ああ、それはわかる」
「映画とか、コンサートとか、商品開発とか、うまくいけば元手が倍になって戻ってくる……みたいなことにはお金を出すけれど、自分と社会のために面白いことをやる、という『ソーシャルファンディング』となると、どうも乗りが悪くなるんだよ」
「でも、ボランティアや寄付文化は二つの震災で以前より根づいたような気がするのだから」
「ボランティアは、あくまで誰かのために自分の労力を提供する……ということだろ。寄付も困っている人への救済だ。自分自身も含めて、社会全体を豊かにするために、誰かを信頼しお金を出し、一緒に事業に参加する……っていうこととは違う。今回のイベントで人々の反応を見て、クラウドファンディングももう一工夫しないと、社会システムを変える力にはならないなあと思うたよ」
橘川さんは、いつも新しいことを考える。生活者の目線で社会をよりよく変えていきたいと思っている人だ。たとえば、民主党政権時代に「子ども手当」というものが支給された。この「子ども手当」を、子どもの将来のためにどう有効に使えばいいかを、橘川さんは真剣に考えて、実行に移した。地域の中で「子ども手当で児童館を」とか、「子ども図書館を」というように寄金を募って、各家族のなかで無意味に消費されてしまいかも知れない子ども手当を



信頼の循環と幸せの循環を 社会に作り出す善意の循環 クラウドファンディングの未来

～寄付文化を考えるシリーズその1～

田口ランディ (作家)

みんなでも有効活用する仕組みを産省に提案した。同時に企業に対して「子ども手当で景気」に向けて、真面目に子どもための商品開発をするように働きかけ、各企業の子どもの向け企画(自然教育であったり、英語教材であったり)をカタログにし出版した。社会に向かつて、子ども手当を子どものために使おう！と呼びかけたのだ。
「子ども手当は税金だ。税金が子どものために一律現金で支給されるというのは、すごい事態だ。消費者も企業も、子どもたちにどう活用ができるかを考えなければいけない」
所得に関係なく子どもがいる家庭に支給される子ども手当という税金、その社会的有効活用について本気で考える、それが「森を見る力」なのだ。国民自身が広い視野をもち、子どもの将来に役立てなければ税金の無駄になる……。その発想に私は目から鱗が落ちた思いだった。

「子ども手当は税金だ。税金が子どものために一律現金で支給されるというのは、すごい事態だ。消費者も企業も、子どもたちにどう活用ができるかを考えなければいけない」
所得に関係なく子どもがいる家庭に支給される子ども手当という税金、その社会的有効活用について本気で考える、それが「森を見る力」なのだ。国民自身が広い視野をもち、子どもの将来に役立てなければ税金の無駄になる……。その発想に私は目から鱗が落ちた思いだった。

なかなか、そういう発想に至らないのは、日本人がちんぼだからでも、やる気がないからでもなく、単に中高年世代に寄付文化が根付いていないからなのだ、と橘川さんは言う。
「文化というのは一朝一夕で変わるものではないからね。いまようやく社会を変える仕組みが整ってきた。これから、人とは本気で繋がりますよ。生き残るためにね」
インターネットという画期的なメディアが生まれて二十年、やっと「クラウドファンディング」が誰でも利用可能になった。これから本気で人と人が繋がりましたら、どんな変革が起きるのだろうか。新しい世代が創る新しい社会を見

てみたい。
田口ランディさん著書のご紹介
『ヒロシマ、ナガサキ、フクシマ』
世界で唯一、原爆を落とされた国が、なぜ原爆大国になったのだろうか？ ヒロシマ・ナガサキとフクシマは、見えない糸でつながっている。そのつながりを、歴史を振り返り、圧倒的な想像力で描き出していく。これからの「核」の話を始めるための、最初の一冊。



田口ランディ(たくち らんでい)作家。2000年に長編小説「コンセンサス」でデビュー。以来、人間の心や家族問題、社会事件を題材にした作品を執筆している。小説以外にも、ノンフィクションや旅行記、対談など多彩な著述活動を展開。2010年より対話のできる世代の育成のため「ダイアログ研究会 明治大学にて」を開催。多くの参加者を育てている。最新作「坐禅カール」(祥伝社)「ソーンにて」(文藝春秋社)「ヒロシマ、ナガサキ、フクシマ」(ちくまプリマー新書)

青少年育成無料公開講座「君の思いは必ず実現する」第2回 講師 奥健一郎氏 鹿児島大学 稲盛アカデミー 専任教授 稲盛和夫と西郷南洲翁遺訓を紐解く(1) 平成26年2月28日(金) 3月1日(土) 参加者の声から
今回の奥先生のセミナーもとても分かりやすく、楽しんで参加できました。稲盛和夫さんは西郷さんから学んでいるというお話し通り、通じているところがとても多く感じました。
中でも「道理」、「正道」というキーワードが多く出てきました。正道とは、誰にも恥じることなくお天道様に顔向けできないような行為をとるのではなく、世界中の人に共通する思い、行為をとっていくということだと思います。
正道をやっていくということは困難であると思いますが、やはり物事を良知でよりよい判断をすることで判断力を磨き、人間性を深めていきたいと思えます。
また「志」の中でどうしたら困難な仕事を絶対的な楽しさにしていくのかについて「使命感」を持つていくという考え方に深く共感しました。今後「使命感」をもって楽しんで正道を歩んでいきたいと思えます。(Iさん)



「正道」という道を進んでいくこと、人生生きていく中で正道を貫くということとは時に大きな苦しみがおしよせてくることもある。しかし、そこで逃げてしまおうかその中でも今自分のやるべきことは何なのか問いつけ、自分の信じてる道を歩むことができるかどうか重要だと思えます。
そして人をだますのは不可能ですが、だまし続けるのは不可能、しかし正しい道は自分の意思で学び続けることが出来ると思えます。自分はこの人生で何を生きる目的にしているのかまだ明確な目標は見えていません。ただ「生きてよかった」と思える人生にしたいと思っています。(Yさん)

公益財団法人いのちの森文化財団では 以下の公益目的事業への寄付金を募集しています

- ① 「高齢者のための生きがい創造基金(死を想い、より良い生を生きる・生と死の統合事業)への寄付」
- ② 「青少年の社会復帰と自立のための育成活動への寄付」
- ③ 「東日本大震災被災地の子供たちの教育を支援する活動(保育園へのお野菜支援含む)」
- ④ 「いのちの森の会費(一般寄付)」

※当財団への寄付金及び会費は、特定公益増進法人への寄付金として、所得税・相続税・法人税の税制上の優遇措置があります。また一部の自治体では、個人住民税の寄付金控除の対象となります。(詳細はお問合せ下さい)

【ご支援の方法】

- ▼郵便振替用紙にてお振込みの場合は、振替用紙に寄付先①～④をご記入の上、お振込み願います。
- ▼銀行振込み・電信振込みの場合は、財団事務局までホームページ・メール・FAX・電話(1ページ目参照)にて寄付先①～④をご連絡の上、お振込みをお願いいたします。

【お振込み先】

- ゆうちょ銀行振替口座 00520-3-42181
- 八十二銀行 本店営業部 普通 1093531
- みずほ銀行 長野支店 普通 1991794

いずれも名義は「公益財団法人いのちの森文化財団」



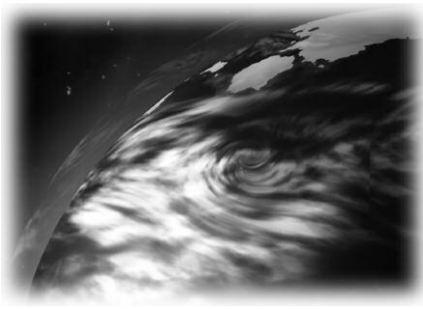
前号では、「生命的な物流原理」にもとづく、貨幣も要らない共同社会が実現するために、人間がこれまで身につけてきた強固な境界意識を弱めることが鍵になると述べました。そのためにはどうすればよいのか？ これはなかなか難しい問題ですが、編集部のご要請を受けて今回この問題を深めてみたいと思います。

いのちが分かれて出来た世界

まず、境界意識を弱めいのちの一体性を思い出すという問題に入る前に、そもそもなぜ境界意識が生じたのかということについて考えてみたいと思います。

現在の科学の知見によれば、私達の住むこの世界は、今から一三七億年前、最初の宇宙の爆発（ビッグバン）により生じ、その膨張の過程で様々な銀河や星々が生まれ、そこからすべての生命が誕生してきたとされています。宇宙が分化せず、すべてが一つのままでいたならば、私達の知る太陽や地球も存在せず、人類がこの地球上に文明を誕生させることもなかったでしょう。その意味で、分化の働きそのものは、この世界におけるいのちの創造・進化における重要な基本原理の一つであると考えられます。

私達人間の意識も、こうした宇宙の分化の過程で生まれてきました。しかし、表面上は分け隔てられているように思える個々人の意識も実は大元でつながっているのだということとは、東洋の宗教哲学や西洋の深層心理学が教えるところでは、これらが説く意識の階層モデルによれば、人間の心には、表層的な顕在意識の下



に潜在意識があり、さらにその奥には、個人の意識を越えた集合意識や、すべての存在と一体である宇宙意識が存在するとされています。こうした分析モデルは、太初の一意識から次第に分かれてきた経緯を持つ人間の意識が、今なお根底において一つにつながっていることを示しているともいえるでしょう。

懸命さがもたらす忘却

しかし残念なことに、前回も述べたとおり、現代に生きる私達は、いのちの一体性を忘れて境界意識を強めてしまった結果、様々な困難を生じさせています。一体なぜこのような事態が生じたのでしょうか？

ここで一つの例として、大きな組織であればみられるセクシヨナリズム（自部門主義）の問題を取り上げてみましょう。それぞれの部門は、もともと固有の使命を帯びて設置されているのですが、いつの間にか部門意識が強まって壁ができ、部門の論理が組織全体の目的に優先されるようになり、極端な場合には組織全体の利益に反する行動をとるようになってしまいます。しかし、これはある意味で、小さな組織が自己になりきって任務を果たそうとして懸命に働いた結果といえるかもしれません。私達人間は、役割を与えられそれを懸命に全うしようとするのを忘れてしまうという傾向をもっているように思われるのです。

しかし、考えてみれば、人間というものは、何か事を成し遂げるときには、過去のことや周囲のことをすべて忘れるほど没頭するのが常であるともいえます。この世界が十分に

発展するためには、分かれた部分がいったん全体のことを忘れる必要があった、すなわち、私達が全体性を見失ったのは分化を通じた発展を推し進めるための必要なプロセスであった、とは考えられないでしょうか。

境界意識を弱める手法

とはいえ、分離の意識が強まりすぎると、やがて共同体そのものを損なうようになることは明らかです。それを免れるには、私達がやはりどこかで分離の錯覚に気づき、再びいのちの一体の意識に目覚める必要があります。

意識の階層的理解に従えば、私達が全体的な意識を取り戻すためには、自分の意識の深奥にアクセスしていく必要があります。そのために昔からある方法としては、たとえば滝行やヨガなど身体行を伴う修行法があります。武道や芸の道を究めることが悟りの境地に導くという伝統も我が国には存在します。一般人には、座禅に代表される内観や瞑想などの方法や、妙なる真言を繰り返すという方法が取り組みやすいでしょう。

さらに最近では、これらの伝統的な手法に加え、新しい心理学や脳科学の研究成果をもとに、人間の捉われを解放していく様々なプログラムが開発されており、容易に参加できるセラピーやワークシヨップなどもあちこちで



馬場真光 (ヴェリタス総合研究所)

貨幣のいらぬ共同社会が実現するためには 思いを馳せ、受け入れる

～境界意識を越えて～



個々に分かれて見える葉 (人間) も大元では一つのいのち

行われていきます。これらの中から自分の状況に合ったものを選んで実践を重ねることが、強まりすぎた自我を弱め、いのちの一体感を育む上で有効であると思われます。

思いを馳せ、受け入れること

しかし、こうした努力の多くにおいて、必ずどこかで出くわす難所があるようにも思われます。それは、どのような方法をとるにせよ、境界意識を取り除こうとすればするほど、それができる自分とできない自分という二元対立ないし境界が生まれ、そこに新たな苦悩が生じてしまう可能性があるからです。

私自身、若い頃から、不器用なくせに世の中の大きな役に立ちたいという、ある意味で厄介なくらい強い願望を抱いてきました。そしてその願望の実現を信じ、努力を続けていたつもりでしたが、四十代も後半になると次第に生活の環境が固定し、このままではその夢は叶えることはできない、という大きな壁にぶつかってしまったのです。当時職場で消耗し心身共に疲れ切っていた私は、さらに昔から思い描いていた夢を実現できない自分の弱さを思い知らされ、絶望感に打ちひしがれました。しかし、自分ではもうどうにもならない、天から授かった（と勝手に思っていた）自分の使命が果たせないなら死んでも仕方がない、とまで諦め切ったとき、それまで色々考えを巡らせてきた私の思いが崩れ去ったのです。「大きないのちによって生かされる自分」という現在にいたる実感が芽生えたのは、そのときのことです。

こうした経験をふまえて思うことは、私達はことさら境界意識を取り除こうとするよりも、初めからいのちの一体の事実そのものを素直に受け入れる方が早道かもしれない、ということだと思います。何も疑わずに心を開き、大自然に広がるいのちの存在に思いを馳せ、それを心から受け入れること。私の思いを捨ててすべてを受け入れようとする心の姿勢こそが、幻

の境界意識から離れるために一番大切な要素であるように思われます。それは努力というよりも一種のイメージトレーニング、あるいは頭のチャンネルの切り替えのようなものといえるかもしれません。

「いのち」の働きへの信頼

このようにいうと、「私の思いを捨てることこそが難しいのだ」とのお叱りを受けるかもしれません。そこで、私はここで一つの大きな希望を指摘したいと思えます。それは、私達の抱える境界意識の問題も、やがては「いのち」そのものが解決してくれるであろう、ということだと思います。

「いのち」とはすべてを生み出し運営する力である、と定義するならば、私達の個別意識を生んだのも「いのち」であり、他の存在との一体性を忘れさせたのも「いのち」であり、それを再び思い出させるのもまた「いのち」の働きである、といえるでしょう。

いのちの一体の自覚に目覚めるために、私達はときに厳しい体験を味わうこともあるかもしれませんが、しかし、すべては大きな「いのち」が導くプロセスであることを信じ、起し、信頼し、安心してもよいものと思えます。

になります。二点つけ加えておきたいと思えます。一つは、社会全体の意識は個人の意識の集まったものであり、一人ひとりの意識のあり方こそがまず重要であるという点です。個人の目覚めは、周囲の人から遠く離れた人の意識にまで必ず影響を及ぼしていくでしょう。もう一つは教育の役割です。頭の柔らかい子供たちに対して、いのちの真理をわかりやすく教える教育プログラムを提供していくことが重要になるでしょう。ただしそのためには、宇宙を知らぬ「いのち」のあり方について、今後あらゆる分野の英知を傾けた説明がなされていく必要があると思われます。

社会全体での意識改革

以上に述べたことは、個人の意識に関する話でした。前号に述べた社会の変革という観点からすれば、社会一般に広がった境界意識が弱まれば、どう取り組めばよいのか、最後

馬場真光 (はばしんこう) 1962年生まれ。上智大学外国語学部卒。学生時代より人間心理と政治経済の双方に関心をもち、日系、外資系の金融機関で実務経験を積んだ。2011年に退職、ヴェリタス総合研究所を創設。現代の物質主義的な人間観・自然観から脱した新しい政治・経済のあり方をテーマに研究活動中。経営学修士(金融論専攻、米田ノースウェスタン大学)、学術博士(人間学専攻、名城大学)。主要論文・訳書: 『経済学の基礎としての人間性の理解について』(ウィルバー哲学の見地から)、『2005年中部哲学全年報第37号』、『ローマ教皇庁教理省「生命のはじまりに関する教書」(共訳、1987年カトリック中央協議会)

